

名勝旧大乘院庭園発掘調査（平城第 390 次） 現地説明会資料

2005 年 9 月 17 日

独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所 平城宮跡発掘調査部

・調査の経緯と経過

奈良文化財研究所では、旧大乘院庭園を管理する（財）日本ナショナルトラストの委嘱を受けて、本庭園の復原整備にむけた資料を得るため、1995 年（平成 7）から継続的な発掘調査を実施しています。発掘調査は、本庭園の中心に位置する東大池の岸に沿って、南岸から反時計回りに進め、2000 年（平成 12）からは西小池跡地の調査をおこなっています。

今年度の調査は、西小池の南西岸を含み御殿や附属施設があったとみられる重要な地点を対象とし、7 月 19 日から重機による表土掘削、そして同 28 日からは作業員による手掘りを開始して、現在なお継続中です。調査面積は 517 m²です。

大面積の発掘調査としては今回が最後の調査であり、これまでの調査とあわせて、西小池の全容とその西側に配置された御殿やその付属施設との位置関係を含めた庭園全体の姿を確定すること、そして下層遺構の究明や池の変遷について手がかりを得ることなどが期待されました。

・大乘院について

大乘院は、一乗院と並び称される興福寺の門跡寺院です。大乘院はもともと 1087 年（寛治 1）に興福寺の北方、今の奈良県庁舎のあたりに開けられました。それが 1180 年（治承 4）に平重衡の南都焼き討ちにあって焼失し、翌年に元興寺の別院である禅定院が置かれていた現在の場所に再興されることになりました。

その後、1451 年（宝徳 3）に徳政一揆によって焼失すると、尋尊大僧正は建物ばかりでなく、庭園の整備もおこなって復興に努めました。このとき、室町時代を代表する庭師の善阿弥がその任にあたりました。西小池が造られたのはこの時と考えられています。新たに改修された庭園は、造営中より名園として注目されたほどでした。そして、以後も大乘院の豊かな経済力を背景に、御殿とともに庭園の改修は続けられ、明治時代初頭まで南都随一の名園と謳われてきました。

しかし、明治時代以後、急速に荒廃していきます。まず、明治維新の神仏分離、廃仏毀釈の方針により、大乘院門跡が 1868 年（明治 1）に廃絶しました。御殿はそのまま松園氏の住むところとなり、やがて 1874 年（明治 7）からは御殿の一部が小学校として利用されるようになりました。そして 1883 年（明治 16）に飛鳥小学校の建設のために旧御殿がすべて取り壊されました。西小池もこのときに埋め立てられたようです。その後、1900 年（明治 33）に飛鳥小学校が現在の紀寺町に移転するまで、一帯が学校用地として使われました。小学校の移転後はいったん荒地と化しますが、1909 年（明治 42）に奈良ホテルが開業し、以後、大池を中心とする庭園部分は奈良ホテルの前庭として役割を果たすこととなります。

こうした長い歴史をもつ大乘院ですが、1958 年（昭和 33）に東大池とそれを取巻く庭園が名勝に指定されます。同年、旧国鉄の宿泊施設大乘苑が東大池の西側に設けられました。しかし、近年の発掘調査の結果、大乘苑の下に西小池が広がることが判明し、2003 年（平成 15）にこの

部分も追加指定をうけました。そして一昨年大乘苑が撤去されるに及び西小池西南部と西側陸地部分について調査することが可能となりました。

・西小池の調査

西小池は2000年(平成12)からの6次にわたる調査により、江戸時代のおおよその姿が判明しています。西小池は南北60m、東西30mの範囲におさまり、北池・中池・南池という異なる形の3つの池から構成されています。池の岸には護岸の石をめぐらせており、岬や州浜を造り出すことによって複雑に入り組んだ汀線を呈しています。くわえて、ヲシマ・メシマ・岩島などによって変化に富んだ景観を演出しています。こうした景観は『大乘院四季真景図』や、『大乘院殿境内図』(宇賀志屋文庫蔵)とも一致しています。その一方で、池内の魚溜りや池底の白色玉石敷きなど絵図からは読み取れない細部の状況を発掘調査で確認することができました。今次の調査は西小池南池の西岸と陸地部分に対する本格的調査と位置付けられます。

・検出した主な遺構 ここでは時代を大きく三つに分けて説明します。

幕末以後

- 1 **西小池排水溝** 西小池の廃絶直前には、池の範囲は入り江部分までかなり北に狭まっていたようです。第310次調査の記録とあわせると、その池尻から12mほどの間は幅50cmほどの素掘りの溝が掘られ、そこを流れてきた水を土管に排水していたことがわかりました。土管は瓦質で、一本の径は約25cm、長さ約60cmを計ります。東西11mにわたって検出されました。
- 2 **東大池排水溝** 東大池の水を西に抜くために掘られたもの。第310次調査で確認された二つの取水口から28mのところでもクランク状に折れ曲がり、さらに西に延びていることを確認しました。幅1.2mで、溝の機能を失ってから杭が溝に沿って打たれています。この杭は工部省(1870~1885年)の標柱と一続きで、土地の境界を示すものとみられますが、それに先立つ排水溝も全体の計画性からすると西小池が廃絶して以後のものと思われる。なお、大乘苑が建てられるころまで機能していたと思われる別の東西溝が調査区南壁に沿ってみつかっています。

江戸時代

一．池部分

- 1 **南池** 底の標高は89.5m。調査区の中には、南池の西半がかかっています。第310次調査で調査された対岸が比較的単純な形態であったのに対して、西岸は4mほどの奥行きが入り江と岬(攪乱のため正確な規模は不明)が形づくられていました。護岸施設としては人頭大の石が並べられていますが、入り江部分には拳大の石を多く用いて州浜状に仕上げられています。なお、護岸の石の裏込めと見られる土が、池尻に近い部分では、広いところで東側では1m、西では2mにわたって確認できます。このように広い裏込めは、もともと幅の広がった南池を改修した際に必要になったものでしょう。
- 2 **排水溝** 江戸時代の池尻から西へ排水するための溝が土管の下でみつかっています。砂が厚く詰まっていますが、池尻から2mほど西に行ったところには径約30cmの木樋が据えられてい

ることがわかりました。土管の下にあって総延長はわかりませんが、庭園西側の遮蔽施設の下を通していたと思われます。

この排水溝も池の改修にともなって何度か改修されたようで、砂がかなり溜まった段階に、堰を築いて水量を調節していた跡がみつかりました。この堰は 20cm 大の石を一行に並べた上に板を横に渡す構造をもつものですが、堰を造り替えた跡も確認できます。

このほか、より遡る時期には西方ではなく南西方向に排水していたことがわかりました。

3 **配石遺構** 庭園の遮蔽施設の西で、東西 3 m にわたって大きな石をめぐらし、中に水を溜めるようにした遺構がみつかりました。排水溝の水を引き込むようになっていたと考えられます。

二．陸地部分

1 **あずまや** 1 間 × 1 間の小さな建物で、穴の底が浅いことから礎石建物と見られます。柱の間隔は東西 2.7m、南北 1.8m を計ります。絵図に見える湛雪亭（たんせつてい）に比定できるもので、その位置は岬状に張り出した岸の南に寄ったところにあたります。絵図では池に張り出すように縁が回されており、周囲の柱穴のいくつかは縁に関わるものである可能性があります。

2 **塀** 湛雪亭の身舎から 1.5m 西に離れた位置で、南北方向に延びる柱穴列を確認しました。湛雪亭の柱筋に揃う柱穴があることから、一連の遮蔽施設とみられます。1.8m ~ 2.0m 間隔で、中に根石を入れた径約 40cm の柱穴が約 13m にわたって計 8 基みついています。ただし、北側の 2 つの穴は間隔が 3.0m と広く、それ以南のものと大きく異なります。

湛雪亭より南では、穴ではなく溝状遺構が北側の柱穴列に筋を揃えて南に延びています。これはそこに横材を敷いて塀の土台とした跡と考えられますが、遮蔽施設であることには変わりありません。あずまやの南北で様相を異にしている様子は、大乘院四季真景図などでも確認できます。しかし真景図では北側は渡り廊下になっています。描かれたものと時期が異なるためでしょう。

3 **井戸**（水溜め） 湛雪亭の南西に 3.5m 離れて、径 1.3m の掘形の中に板を縦にめぐらした径 1.0m の円形の遺構がみつかりました。

4 **方形土坑群** 塀の内側で御殿の庭と考えられる場所から、それぞれ東西 2.5m × 南北 2.5m、東西 2.5m × 南北 2.3m の四角い形の土坑 2 基がみつかりました。そのうち、北側の土坑は、内部に多量の石と瓦が詰まっています。これらは池や御殿の改修に伴って捨て込まれたものとみられますが、南側の土坑には石や瓦はみつかりません。しかしながら、2 基の土坑はほぼ同じ大きさであり、なおかつ南北に軸を揃えていることから、一連のものと判断できます。

室町時代以前

1 **掘立柱建物** 建物基礎の内側で、1.8m（6 尺）等間の東西棟掘立柱建物の東妻部分を確認できました。西側はさらに建物基礎の下に続いているようです。検出した 4 基の柱穴にはいずれも礎板石が敷かれていました。

2 **井戸** 東西 1.4m、南北 1.8m、深さ 1.4m 以上の素掘りの井戸です。底は瓢箪形で南側が円形にさらに深くなっており、そこに水を溜めるようになっています。11 ~ 12 世紀頃の土器が底に近いところから出土しています。

3 **礫敷遺構** 第 374 次調査で東端をみついているもので、江戸時代の遺構面の下で南北 3 m、東西 5 m の範囲に広がっていくようです。浅く掘り窪めたところに 5 ~ 10cm 大の平らな石を敷き詰めた遺構で、そこを水が流れた形跡があります。中から室町時代の土器が出土しています。東側にはこの遺構にともなうと見られる水溜め（井戸？）があります。

4 **土器溜まり** 第 374 次で発掘された土器溜まりは、方形土坑によって未調査部分をほとんど破壊されていることがわかりました。土器溜まりは礫敷遺構によっても北側を破壊されていますが、範囲はそれを越えて南北 8 m に及びます。鎌倉時代の土師器が多量に捨てられています。

このほか、建物基礎に囲まれた部分を含む調査区中央では多数の柱穴や土坑が重複してみついています。また、調査区北半から中央にかけての部分でも掘立柱建物かとみられる柱穴群や、鎌倉時代の土器を含む溝状遺構などがあります。いっぽう、調査区南西隅の落ち込みでは奈良時代から平安時代の土器が出土しています。

・ 出土遺物

遺跡の上に運ばれてきた大量の土砂や瓦礫に含まれる近・現代の遺物を除くと、奈良時代以後の各時代の土器（土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、陶磁器）や瓦が出土遺物の大半を占めます。また、寛永通宝 2 枚や鉄釘類も出土しています。

・ まとめ

1 西小池南池西半の様相がはっきりしたことにより、西小池の全貌がほぼ確定したことになります。つまり、東岸の単純な輪郭に対して、西岸はかなり入り組んだ格好に作り、斜面を覆う護岸の石と州浜で仕上げていたことが判明しました。これは多分にあずまやを設けることと関係があるとみられます。また、大掛かりな裏込めの存在や何時期もの排水施設から、西小池が幾度か改修され形を変えていることがわかりました。

2 西小池に加え、絵図に見る庭園の遮蔽施設やあずまやが遺構として確認されたことによって復原整備のための貴重なデータが得られました。調査成果を基準に隆遍僧正大乗院指図（18 世紀中ごろ）と興福寺旧大乘院庭苑図（1939 年模写）を重ねあわせることにより、寝殿を含む大乘院の御殿がどの位置に存在していたのかを知ることができます。それを見ると、方形土坑群が、ちょうど寝殿の身舎を避けてその南に掘り込まれていることがわかります。また、先に調査区北側で塀の柱穴間隔が広がると指摘しましたが、それは寝殿にとりつくため形を変えられたせいであろうと理解できます。

3 建物基礎内部を含む調査区中央に多数認められた柱穴や土坑は、西小池が整備される以前にこの付近がさかんに利用されていたことを示すもので、これまで所在のわからなかった尋尊の時期ないしそれ以前の御殿の痕跡の一部と考えられます。江戸時代には御殿は北に移っていることが絵図などから確認できますが、室町時代以前に遡る御殿の一部が確認できたことは、御殿の変遷だけでなく西小池の成立過程を考える上でも、大きな手がかりを得たといえることができます。

用語解説

1 門跡（もんぜき）

天皇家や摂関家の子弟によって継承される院家またはその院主。

2 尊尊（じんそん 1430 - 1508）

室町時代の興福寺の僧侶。大乘院門跡。一条兼良の子。その日記を中心とする『大乘院寺社雑事記』は応仁の乱前後の基本史料として有名。

3 善阿弥（ぜんあみ 1386? - 1482）

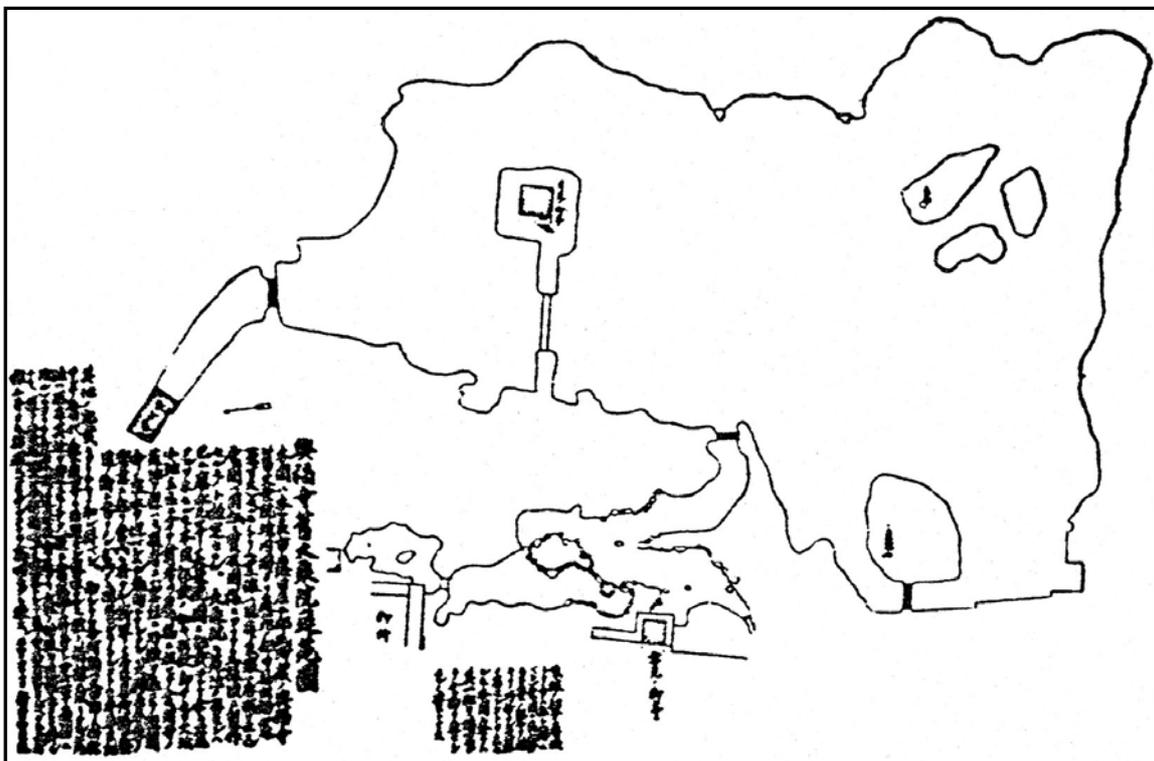
室町時代の庭師。足利義政の同朋衆としてその庇護を受け、室町殿や相国寺蔭涼軒の庭を造ったといわれていますがいずれも現存しません。『大乘院寺社雑事記』によると、大乘院の庭の整備に深く関わったことがわかり、大乘院庭園はその作風を伝える唯一の実例といえます。

4 大乘院四季真景図（だいじょういんしきしんけいず）

四季を織り交ぜた大乘院の情景を絵画的手法で描いた近世の絵図。西から西小池・東大池を俯瞰して描く同じアングルのものが、興福寺、柳生家、奈良ホテルなどに数種類伝来しています。これまでの発掘調査成果との照合によって、当時の風景を比較的忠実に描いていることがわかってきています。

5 大乘院殿境内図（だいじょういんのけいだいず）（宇賀志屋文庫蔵）

大乘院庭園を伝統的な絵画手法で描いた近世の絵図。西小池西側の殿舎群も克明に描いています。ただし、大乘院四季真景図と異なる部分があります。



興福寺旧大乘院庭苑図

西小池は「北池」「中池」「南池」にわかれ、その中に「メシマ」「ヲシマ」と呼ばれる小島や岬が見られるなど、東大池よりもかなり複雑なつくりになっています。

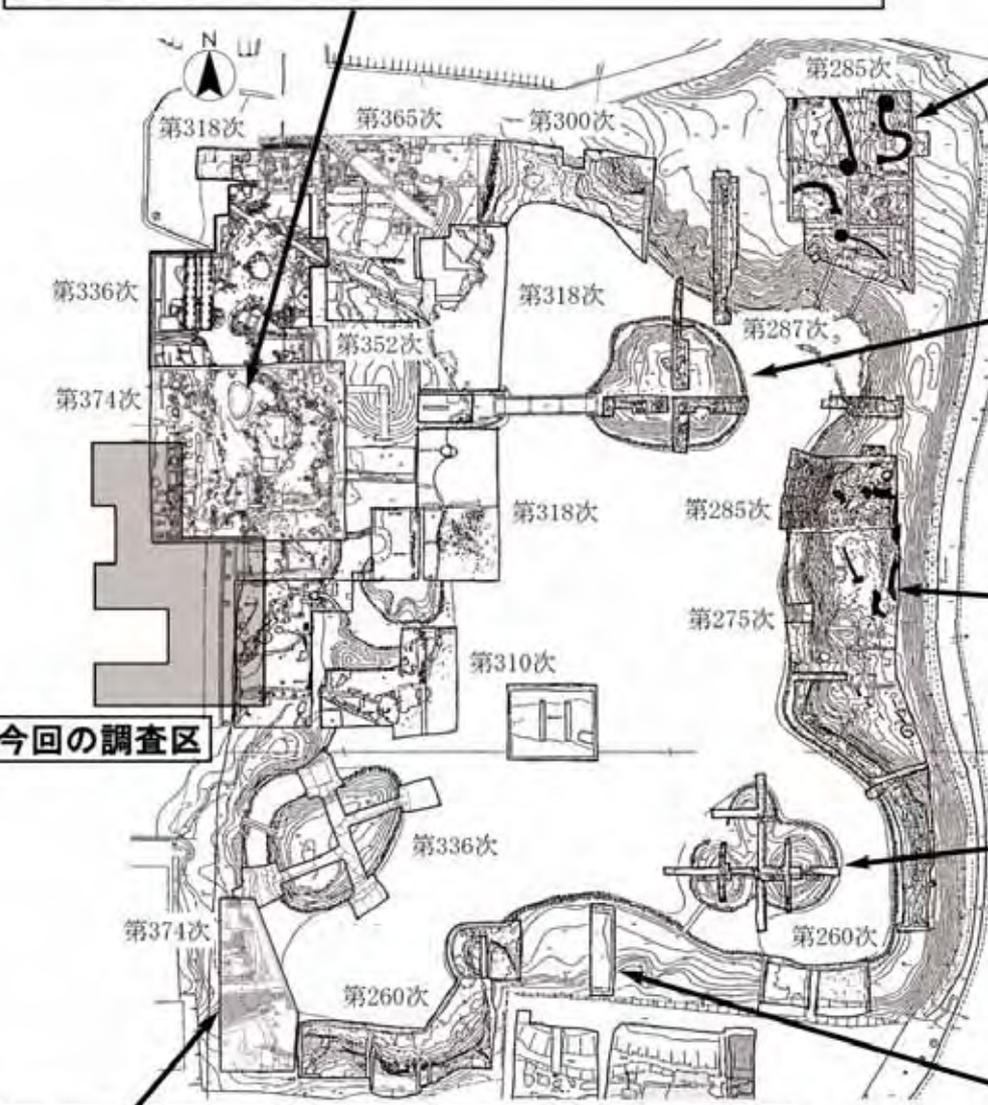
東大池北側の陸部分は近代に土が盛られて大きく変化しています。昭和初年にはミニゴルフ場もつくられ、その跡が発掘で明らかになりました。

北中島は地山を削ってつくった基礎に、土を盛り上げてつくっています。この盛土の下から池がつくられる以前と考えられる土器が出土しました。

東池東岸は中世・近世の庭園の状態を比較的良好に残しているようです。

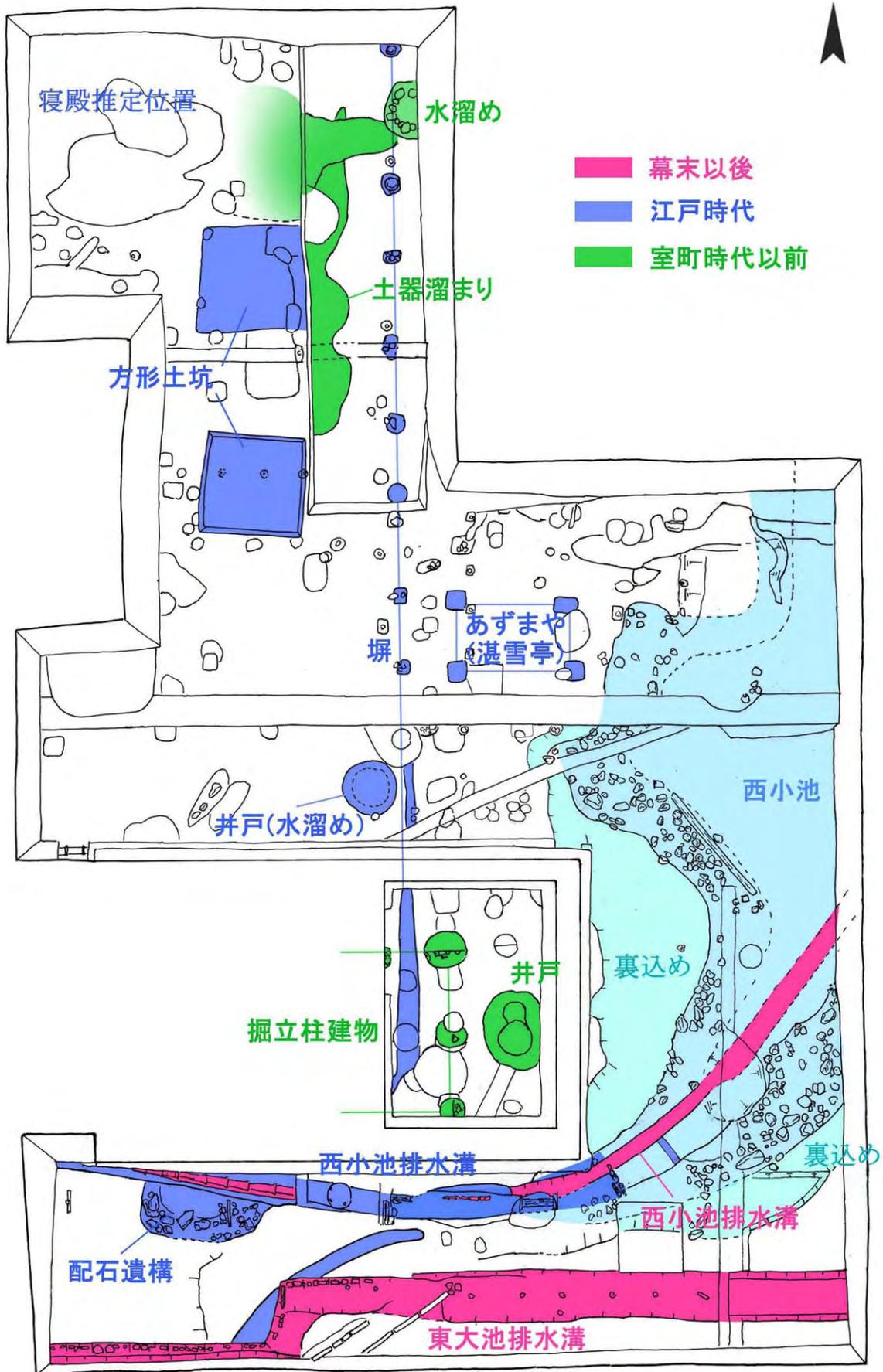
これらの「三ツ中島」は江戸時代につくられたものであることがわかりました。

東池南岸は池がつくられた時は自然の地形を利用したものであったようですが、中世以降急勾配の護岸につくり直されていることがわかりました。

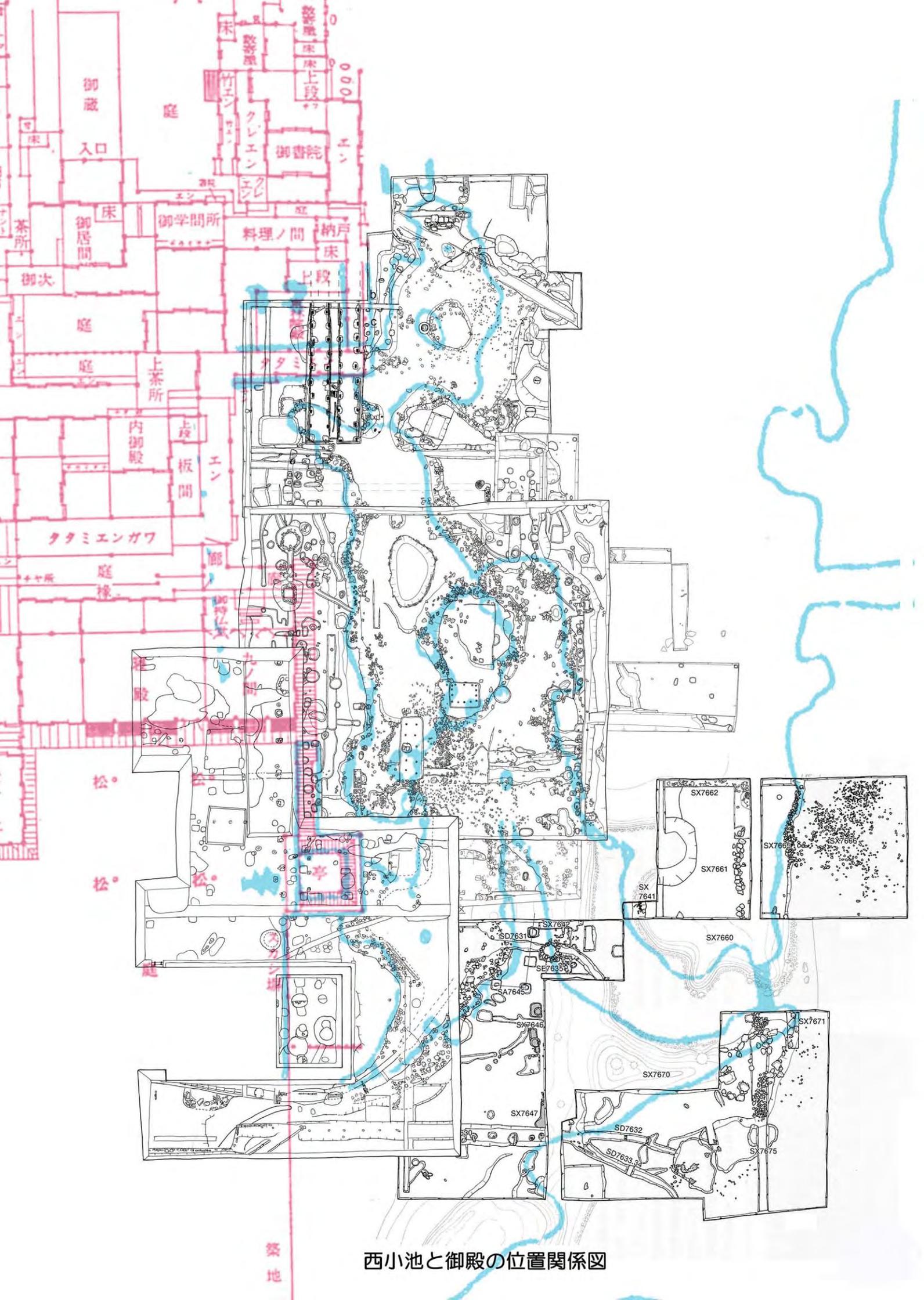


東大池の南西部では近世末の池岸の下から、12世紀頃の池岸がみつかりました。この池岸は大乗院成立以前のものでした。

調査位置図



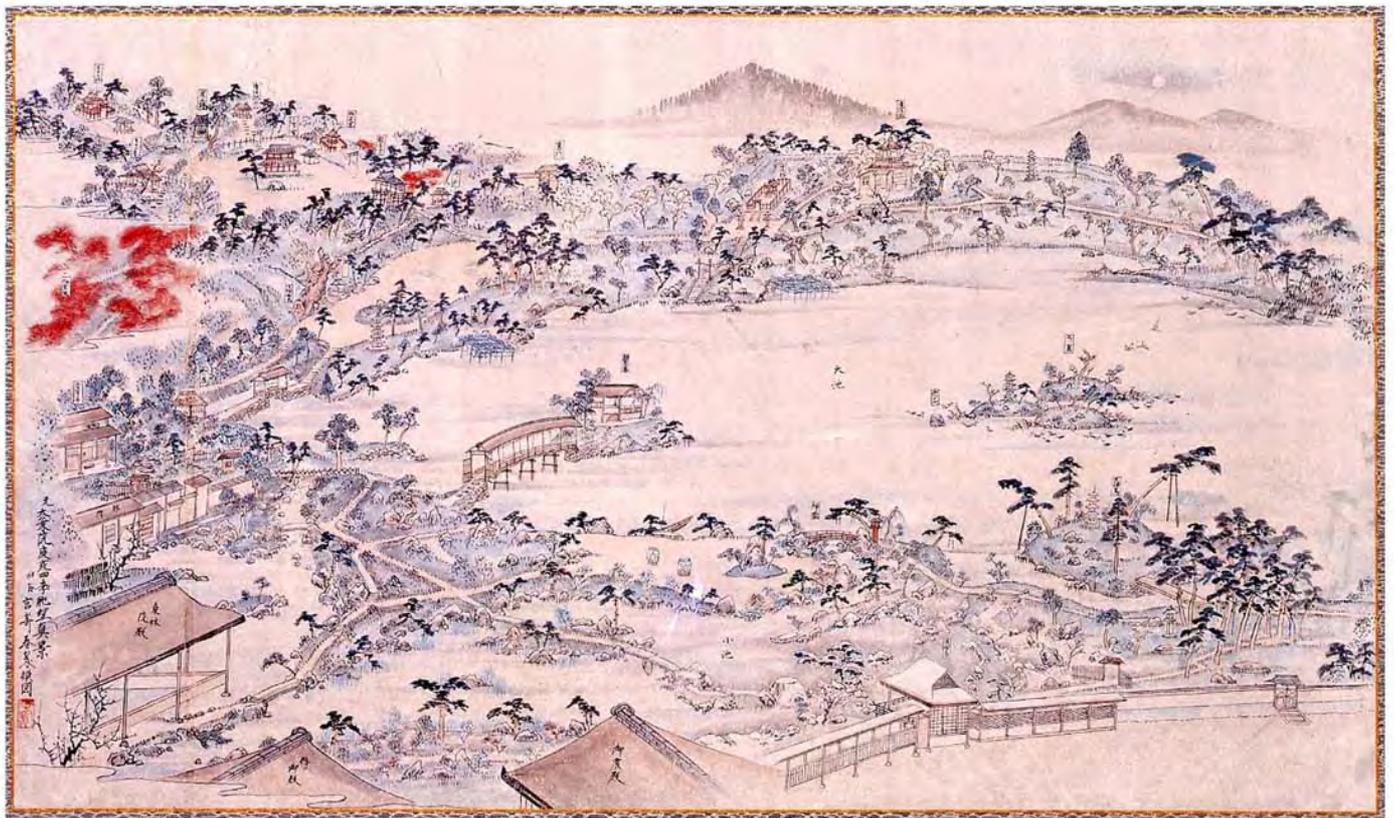
平城第390次調査 遺構平面図 1:100



西小池と御殿の位置関係図



大乘院殿境内図 (宇賀志屋文庫蔵) (部分)



大乘院四季真景図 (奈良ホテル蔵)